

歴史講演会

『よみがえる古代の伊賀国庁』

— 歴史的意義と保存・活用 —
のご案内

邪馬台国に関する諸説が新聞紙上を賑わせています。伊賀市でも、時代は異なりますが古代伊賀国の役所である国庁跡の所在地は長い間、特定されなままでした。以前から「府中」という地名が残される伊賀市北部の旧府中村周辺に存在したと考えられていて、歴史地理学的立場から柘植川南岸地域で服部川との間に広がる沖積地が国庁跡の有力な候補地と想定されていました。

昭和63年からこの地域一帯において、ほ場整備事業が実施されることとなり、県埋蔵文化財センターにより事前の範囲確認調査が実施され、調査結果に注目が集まりました。しかし、国庁が存続していた奈良・平安時代の遺構は希薄な状況であり、検出された遺構・遺物は他の時代のもものが主体を占めました。

調査の重点は柘植川北岸地域に移ることとなり、特に坂之下地区においては、大型の掘形を有する柱穴が多数検出されました。調査を進めた結果、品字状に配置された掘立柱建物群が検出され建物の変遷も確認されました。遺構以外にも、片面硯、木簡など役所的な色合いの濃い遺物や、周辺の調査で「国厨」と書かれた墨書土器が出土したこと、地元の方々が坂之下地区の字名である「国町」を「こくつちよ」と呼んでいることなどによっ

て、所在地が特定されることとなりました。

伊賀国庁は主要な施設の位置関係がほぼ判明し、古代伊賀の政治情勢を示す貴重な遺構です。伊賀国は古代律令体制下では下国とされますが、下国の国庁の実態がこれほど判明しているのは伊賀国庁が初めてで、平成21年7月23日に国史跡に指定されました。

今回、奈良大学教授の坂井秀弥さんを講師にお招きして、伊賀国庁跡の意義や全国各地の整備事例などをお話していただく予定です。たくさんのご参加お待ちしております。

【とき】 1月24日(日)

午後1時30分～3時(予定)

【ところ】 城東中学校(印代) 多目的ホール

【講師】

奈良大学文学部文化財学科

教授 坂井 秀弥さん

【問い合わせ】

生涯学習課文化財係

☎ 22・9681 FAX 22・9691



▲伊賀国庁跡(北上空から)
三重県埋蔵文化財センター提供

今月の表紙

蓬萊飾りとは、三宝の上に洗い米を敷き、齒朶(ウラジロ)、ユズリハ、松竹梅、お餅、橙、干し柿、ホンダワラ、伊勢えび、熨斗あわび、勝ち栗、昆布などを飾ります。

齒朶(ウラジロ)は、裏表のない心清らかにという意味で、ユズリハは古い葉が落ちて、新しい葉が生まれることから、長寿と譲り合いの心を、橙は、熟してもなかなか落ちないことから、先祖代々の繁栄を、ホンダワラ(海の幸)は、藻を刈るから儲かるに、そのほかの物も、長寿や繁栄などの意味があり、正月のあいさつに訪れた人は、蓬萊飾りに手をかけてあやかろうと正月の挨拶をしました。

蓬萊飾りは、やがてはおせちへと、食べられるものに進化をしていきます。



市の花
ササユリ



市の木
アカマツ



市の鳥
キジ